

鳥栖市文化財調査報告書第79集

四 ツ 木 遺 跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

2007

鳥栖市教育委員会

序

本書は、共同住宅建設に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、鳥栖市曾根崎町に所在する四ツ木遺跡の調査報告書です。

中近世の集落跡が確認され、貴重な資料を多く得ることが出来ました。

本報告書を通して地域の文化財に対して一層のご理解をいただき、また学術文化の向上に幾分か寄与するものであれば幸いに思います。

最後になりましたが、開発と文化財保護との調整に、ご理解とご協力をいただきました、古賀武文様ならびに地元の皆様、また発掘作業や整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

平成19年3月30日

鳥栖市教育委員会
教育長 中尾 勇二

例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した、曾根崎町に所在する四ツ木遺跡4区および5区の調査報告書である。
2. 発掘調査は、4区が平成15年5月19日～6月20日、5区は平成18年12月11日～22日、整理報告は平成19年1月5日～3月30日まで、古賀武文氏の委託を受けて鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 出土遺物の整理を含む報告書作成作業は鳥栖市牛原町文化財整理室で行った。
 - ・発掘作業 栗山満恵・高田伊莫・徳渕直広・宮地貞子・諸永幸子・龍頭啓一（4区）
榎藤イツヨ・高田伊莫・中島貞子・平田博子・山下重信・山本美代子（5区）
 - ・遺構実測 中村光子・平田（4区）
榎藤・山本・中島・平田・内野 武（5区）
 - ・遺構遺物写真 鹿田昌宏・久山高史・島 孝寿
 - ・遺物復元 榎藤・山本
 - ・遺物実測 榎藤・山本
 - ・製 図 松崎友子
4. 本書の執筆・編集は島・久山が担当した。

凡 例

1. 遺跡の略号は四ツ木遺跡（KYG）である。
2. 遺構図に用いた方位は、5区が座標北である。なお4区については日本座標を使用している。

本文目次

第1章 調査の概要	1
I. 調査に至る経過	1
II. 調査の組織	1
III. 遺跡の位置と環境	2
第2章 4区の調査	3
第3章 5区の調査	10

挿図目次

図1 四ツ木遺跡位置図(1/5000)	1
図2 遺跡分布図(1/10,000)	2
<u>四ツ木遺跡4区</u>	
図3 4区遺構配置図(1/200)	4
図4 SD401・402・403溝土層図(1/40)	4
図5 SF401道路土層図(1/40)	4
図6 SE401・402・403井戸(1/30)	5
図7 出土遺物1(1/3)	6
図8 出土遺物2(1/3)	7
<u>四ツ木遺跡5区</u>	
図9 5区遺構配置図(1/100)	11

表目次

表1 四ツ木遺跡4区出土遺物一覧表	8
-------------------	---

写真図版目次

写真図版1	1. 四ツ木遺跡4区全景(西から) 2. 同(東から) 3. SE401井戸(南から)
	4. SK401~SK404土坑(東から) 5. SD403・404溝(東から) 6. SF401道路(北から)
	7. 出土遺物1 8. 出土遺物2
写真図版2	1. 四ツ木遺跡5区全景(北西から) 2. 同(北東から) 3. 同(南から)
	4. SE501井戸(東から) 5. SE502井戸(西から) 6. 柱穴柱根残存状況(北から)
	7. 出土遺物1(内野山窯皿) 8. 出土遺物2(染付皿)

報告書抄録

ふりがな	よつぎいせき							
書名	四ツ木遺跡							
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
編著者名	島 孝寿 久山高史							
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 TEL0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よつぎいせき 四ツ木遺跡 4区	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市 そねぎきまちあぢまへ 曾根崎町字前 1143-12	410213	—	33° 21′ 47″	130° 31′ 06″	2004.5.19 ～ 2004.6.20	490m ²	共同住宅
よつぎいせき 四ツ木遺跡 5区	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市 そねぎきまちあぢまへ 曾根崎町字前 1145-1	410213	—	33° 21′ 39″	130° 31′ 06″	2006.12.11 ～ 2006.12.22	120m ²	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
四ツ木遺跡 4区	集落跡	古代 中世	井戸・溝・土坑・ 道路跡	土師器 陶磁器		古代、中世の集落跡		
四ツ木遺跡 5区	集落跡	中世 近世	井戸・掘立柱建物	土師器 陶磁器		中近世の集落跡		

第1章 調査の概要

I. 調査に至る経過

発掘作業

4区

平成15年4月14日付けで、古賀武文氏より鳥栖市曾根崎町字前1143-12について、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が鳥栖市教育委員会に提出された。対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地（四ツ木遺跡）内であり、平成15年4月28日に確認調査を実施したところ、650㎡から古代末～中世の集落跡が検出された。協議の結果、建物部分（490㎡）について記録保存を計ることで合意し、調査は平成15年5月19日～6月20日にかけて本調査を実施した。

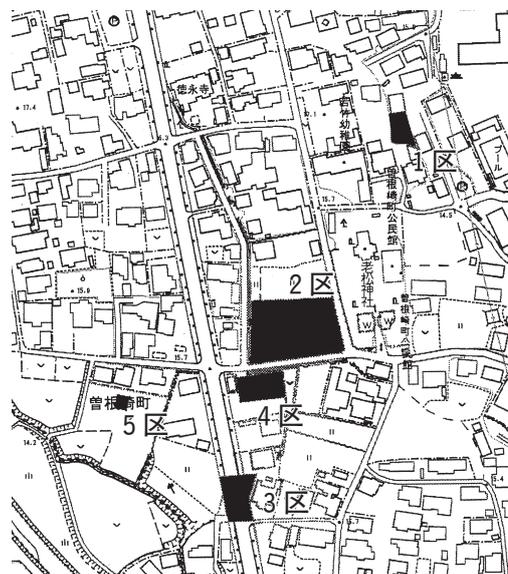


図1 四ツ木遺跡位置図 (1/5000)

5区

平成18年8月31日付けで、古賀武文氏より鳥栖市曾根崎町字前1143-3、1145-1について、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が鳥栖市教育委員会に提出された。対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地（四ツ木遺跡）内であることから、9月13日・11月22日に分けて確認調査を実施した。その結果、対象地内200㎡から中近世の集落跡を確認した。協議の結果、建物部分（120㎡）について発掘調査を行い記録保存することで合意し、平成18年12月11日～22日にかけて本調査を実施した。

整理作業

出土遺物・調査記録類の整理ならびに調査報告書作成業務は、平成18年度事業として平成19年1月5日～平成19年3月30日の期間、鳥栖市牛原町文化財整理室において実施した。

II. 調査の組織

鳥栖市教育委員会が主体となって実施した。組織は以下のとおりである。

調査主体	鳥栖市教育委員会
教育長	中尾勇二
教育部長	近藤繁美（平成15年度）・篠原正孝（平成18年度）
教育部次長	木塚輝嘉（平成15年度）・陣内誠一（平成18年度）
生涯学習課長	西川和彦（平成15年度）・西山八郎（平成18年度）
生涯学習課参事	高尾泰明（平成15年度）・藤瀬禎博（平成18年度）・横尾順二（平成18年度）
生涯学習課長補佐兼文化財係長	石橋新次
生涯学習推進係事務吏員	田中美香（庶務担当）

文化財係主査 鹿田昌宏（平成15年度：4区調査担当）・向田雅彦・湯浅満暢・
 久山高史（5区調査担当、報告書担当）・重松正道
 文化財係事務吏員 内野 武（5区調査担当）・島 孝寿（報告書担当）
 調査協力 佐賀県教育委員会

III. 遺跡の位置と環境

鳥栖市は、福岡県久留米市・小郡市・筑紫郡那珂川町と県境を接し、南には筑後川が流れ、北は脊振山地の東端に有し、東西に筑後平野・佐賀平野を持つ地域である。現在では九州縦貫道と九州横断道、JR鹿児島本線と長崎本線及び久大本線、国道3号線・34号線等が交差し、また古代には大宰府・筑後国府・肥前国府を結ぶ官道（城の山道・筑後路・肥前路）、近世には長崎街道が通過する場所に立地しており、長い間九州の大動脈を結ぶ交通の要衝の地である。

市内の遺跡は、主に高位段丘～低位段丘上で展開しており、旧石器時代～近世にかけて約180遺跡が確認されている。また沖積層が広がる南部地区では、遺跡の痕跡は殆どみることができない。

四ツ木遺跡は、九千部山（848m）の南から城山（501m）・群石山（201m）に至る支嶺の間の断層線に沿って流れる大木川左岸地区の中位段丘上に立地する。時代的には、弥生時代・古代～中近世の遺構で構成されている。弥生時代については円形住居、溝などが確認されているが、遺跡の中心を成しているものは、中世の集落跡である。文献等から地頭職曾根崎氏関連の遺跡であると推定されている。

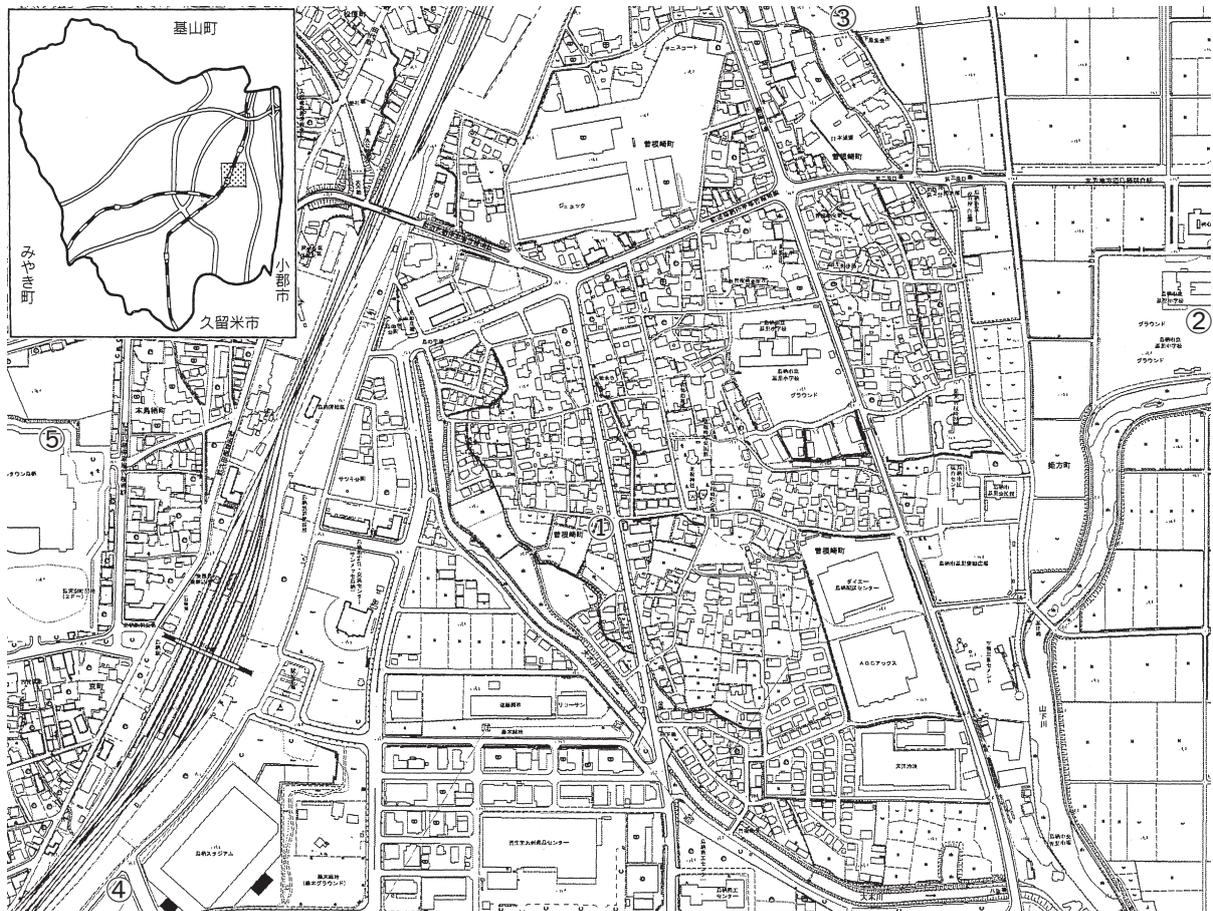


図2 遺跡分布図 (1/10,000)

- ①四ツ木遺跡 ②浦田遺跡 ③下原遺跡 ④藤木遺跡 ⑤京町遺跡

第2章 四ツ木遺跡4区の調査

鳥栖市曾根崎町字前1143-12に所在する。調査区域は大木川左岸200m東、標高約15mの中位段丘上に立地する。共同住宅建設に伴う発掘調査で平成15年5月19日～6月20日にかけて実施した。なお調査面積は建物により影響を受ける約490㎡を対象としている。調査前の現状は水田である。

調査の結果、古代～中世の遺構遺物が確認された。古代の遺構は井戸2基（SE402・SE403）、土坑1基（SK404）が検出され、土師器碗、坏等が出土した。中世の遺構としては、井戸1基（SE401）、土坑3基（SK401・SK402・SK403）、溝3条（SD401・SD402・SD403）を確認した。出土遺物は、青磁・土師器・瓦質土器が出土している。また、中世後半期の屋敷区画と思われる溝2条（SD403・SD404）と調査区の西端からは幅1.8m（側溝を含めると幅3.7m）の道路跡（SF401）を長さ約10mにわたり確認した。この道路跡は、区画溝とほぼ直角に交差しており、道路面は砂利敷きで両側に側溝を有している。方向はほぼ南北で検出した。遺物は染付け、青磁、白磁、土師器等が出土した。

《井戸》

SE401井戸（図6）

長軸1.86m、短軸1.70m、深さ1.50m+を測る。完掘しておらず、深さ等は不明であるが、二段掘りの構造を有している。円形プランでSD401・402を切っている。遺物は出土していない。

SE402井戸（図6）

長軸1.10m、短軸1.00m、深さ1.20m+を測る。平面は円形プランで、断面はフラスコ状である。深さについては完掘できていないため不明である。遺物は土師器、瓦質土器、白磁が出土している。

SE403井戸（図6）

長軸1.70m、短軸1.64m、深さ1.70m+を測る。円形プランである。完掘できていない。遺物は土師器が出土している。

《土坑》

SK401土坑（図3）

長軸1.20m、短軸1.15m、残存壁高0.10mを測る。遺物は土師器が出土するが碎片のみである。

SK402土坑（図3）

長軸1.95m、短軸1.75m、残存壁高0.10mを測る。遺物は土師器が出土するが碎片のみである。

SK403土坑（図3）

長軸2.40m、短軸2.30m、残存壁高0.10mを測る。遺物は土師器が出土するが碎片のみである。

SK404土坑（図3）

長軸2.20m、短軸1.95m、残存壁高0.10mを測る。遺物は土師器が出土するが碎片のみである。

《溝》

SD401溝（図3・図4）

東西に延びる溝で、SE401井戸に切られている。幅1.30m、深さ0.80mを測る。遺物は瓦質土器・青磁・

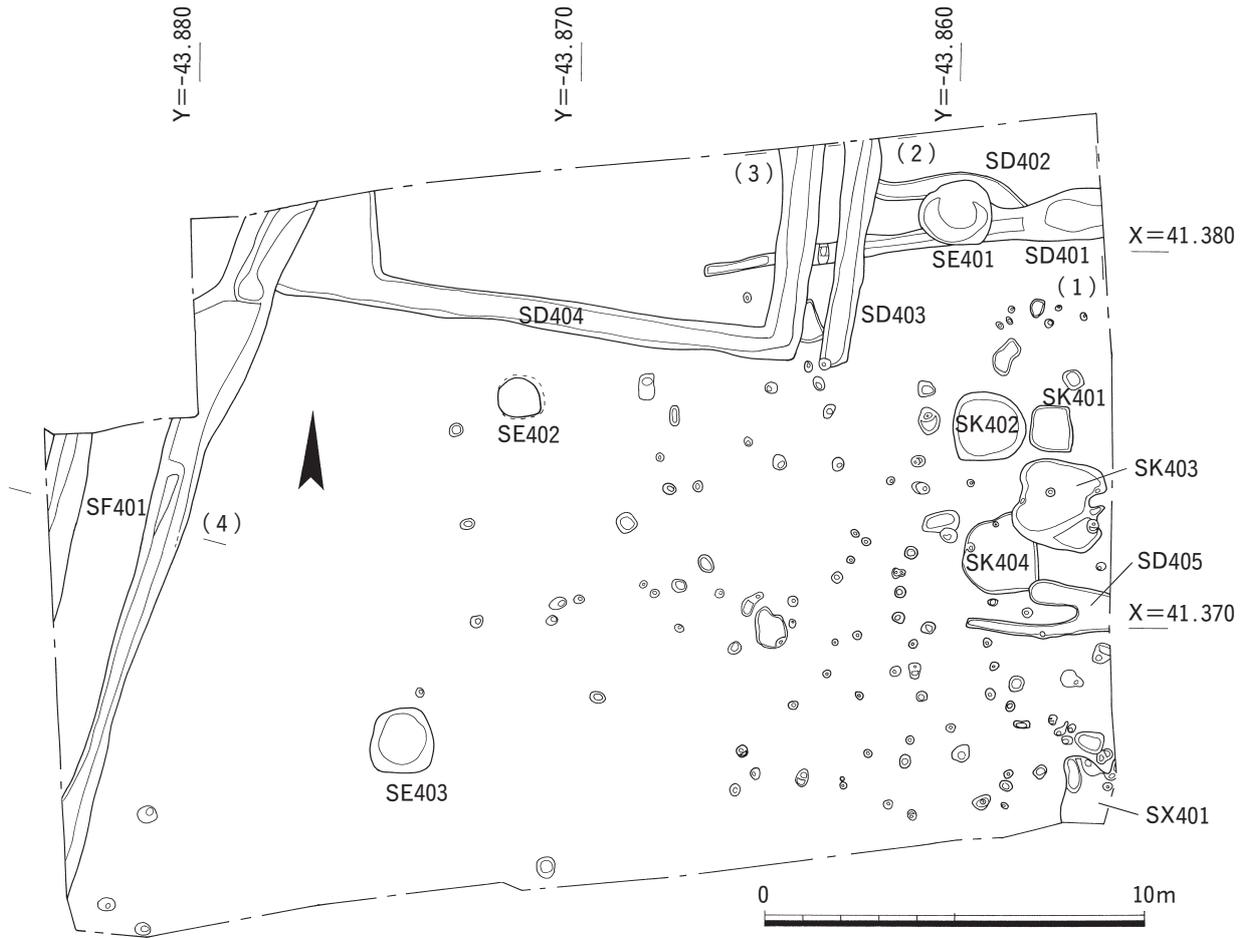


図3 4区遺構配置図 (1/200)

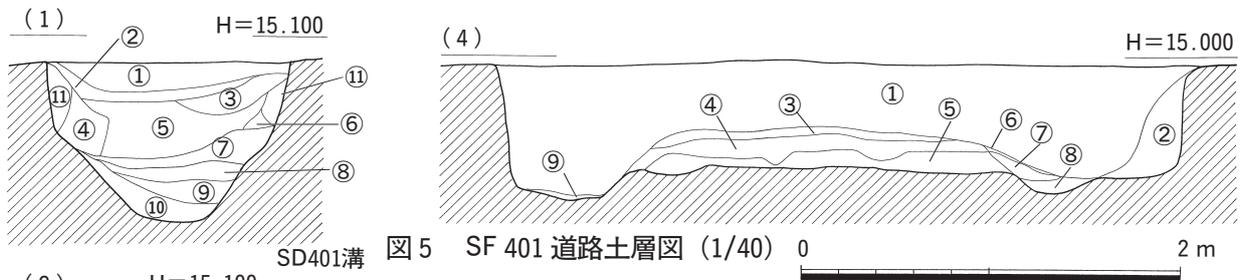


図5 SF 401 道路土層図 (1/40)

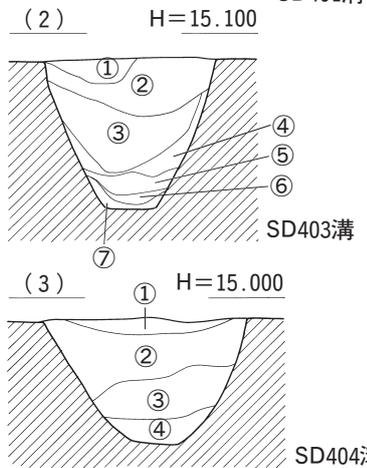


図4 SD 401・402・403 溝土層図 (1/40)

- | | |
|---|--|
| <p>SD401溝土層</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 暗灰色土 2 灰褐色土 3 黄褐色粘質土 4 暗灰褐色土 5 灰褐色砂質土 6 黄灰色砂質土 7 黄褐色粘質土 8 暗黄褐色粘質土 9 暗灰褐色土 10 明灰褐色砂質土 11 明褐色土 <p>SD404溝土層</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰褐色土 2 暗灰褐色土 (黄褐色土を含む) 3 黄褐色粘質土 4 暗灰褐色土 (黄褐色粘質土を若干含む) | <p>SD403溝土層</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 茶褐色粘質土 (灰褐色砂質土を含む) 2 黄褐色粘質土 (暗灰褐色土を含む) 3 暗灰褐色土 (黄褐色土、暗灰色土ブロックを含む) 4 暗灰褐色土 5 暗灰褐色土 (黄褐色土を含む) 6 暗灰褐色土 7 灰褐色土 (黄褐色土を含む) <p>SD401道路土層</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 茶褐色粘質土 (灰褐色土ブロックを含む) 2 黄灰褐色粘質土 3 灰色砂礫土 (道路面) 4 灰色砂礫土 5 黄褐色砂質土 6 暗灰褐色粘質土 7 明黄褐色土 (暗黄灰色土を含む) 8 暗黄褐色粘質土 9 暗黄褐色粘質土 |
|---|--|

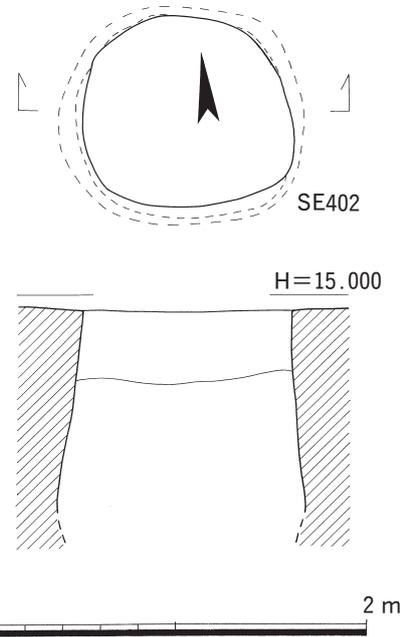
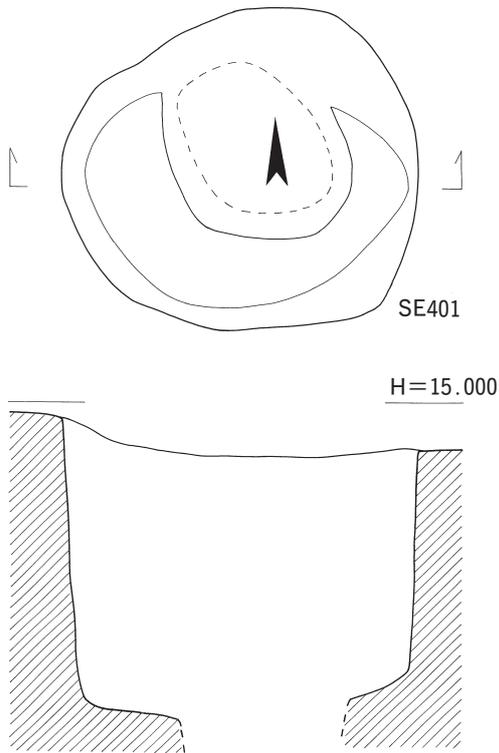
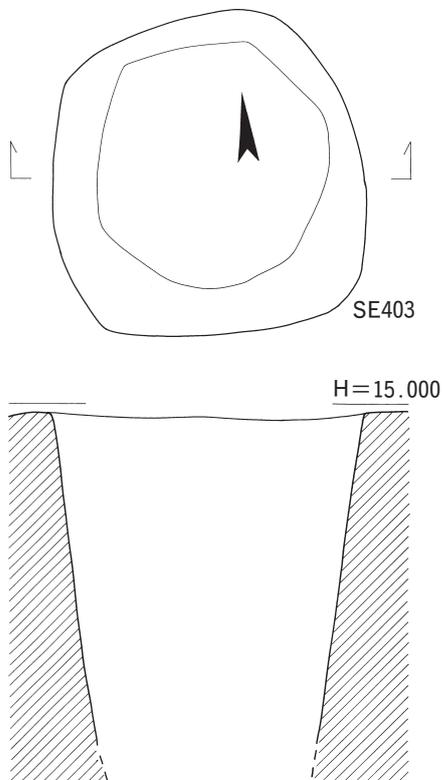


図6 SE 401・402・403 井戸 (1/30)



土師器が出土する。

SD402溝 (図3)

詳細については不明であるが、SD401・SD403に切られている。

SD403溝 (図3・図4)

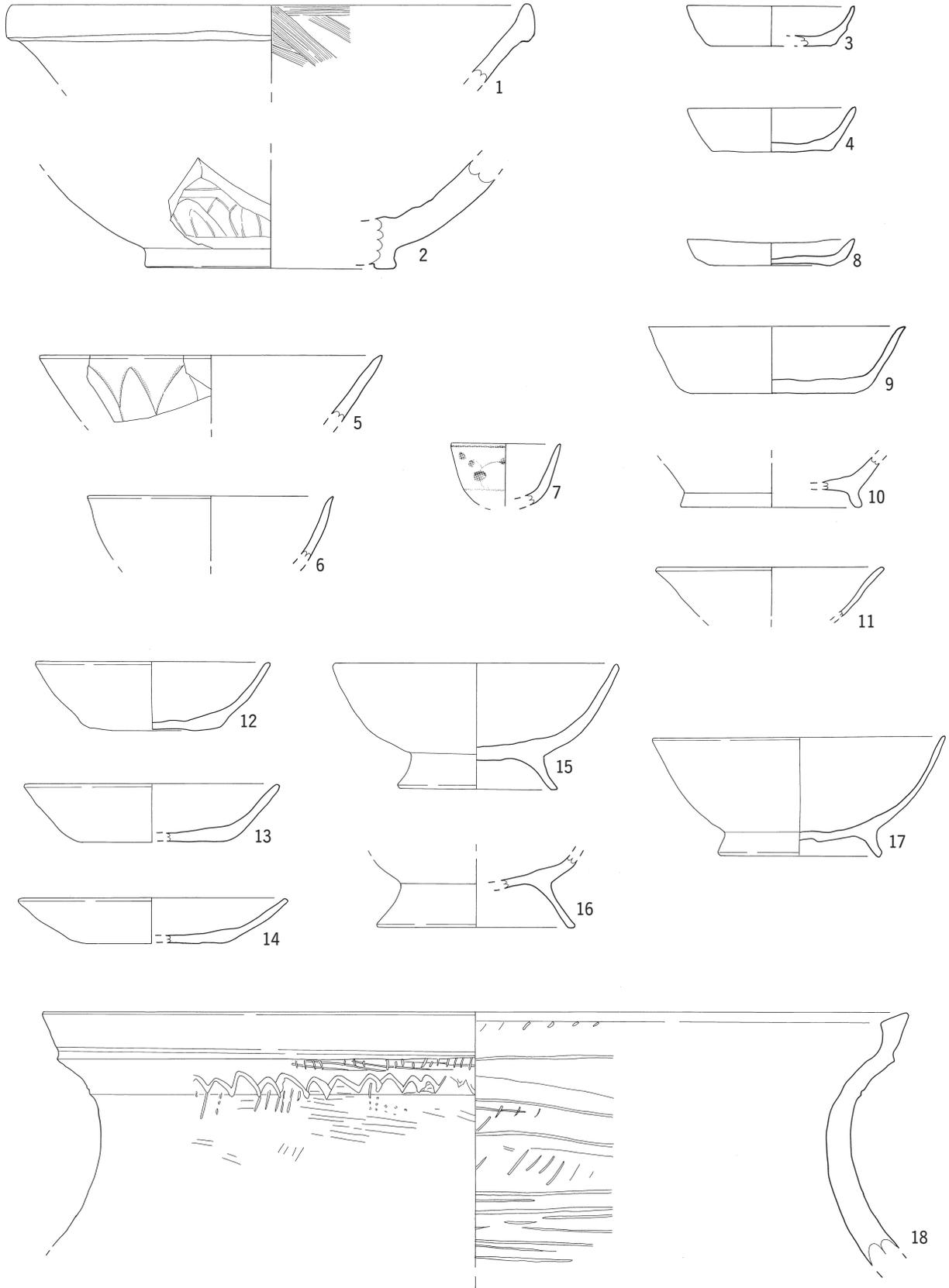
南北に伸びる溝。幅0.90m、深さ0.80mを測る。遺物は碎片のみである。

SD404溝 (図3・図4)

南北及び東西に伸びる溝。区画溝思われる。幅1.10m、深さ0.70mを測る。遺物は青磁、白磁、染付けが出土する。

SF401道路跡 (図3・図5)

北東から南西にかけて調査区西側を横断している。長さ約20m、幅3.7mの道路跡である。両サイドに溝(側溝)が掘られ、約2mの砂利敷きの整地された層が確認できた。区画溝と交差するよう作られており、南北に関しては平行に配置されている。



0 10cm

图7 出土遺物 1 (1/3)

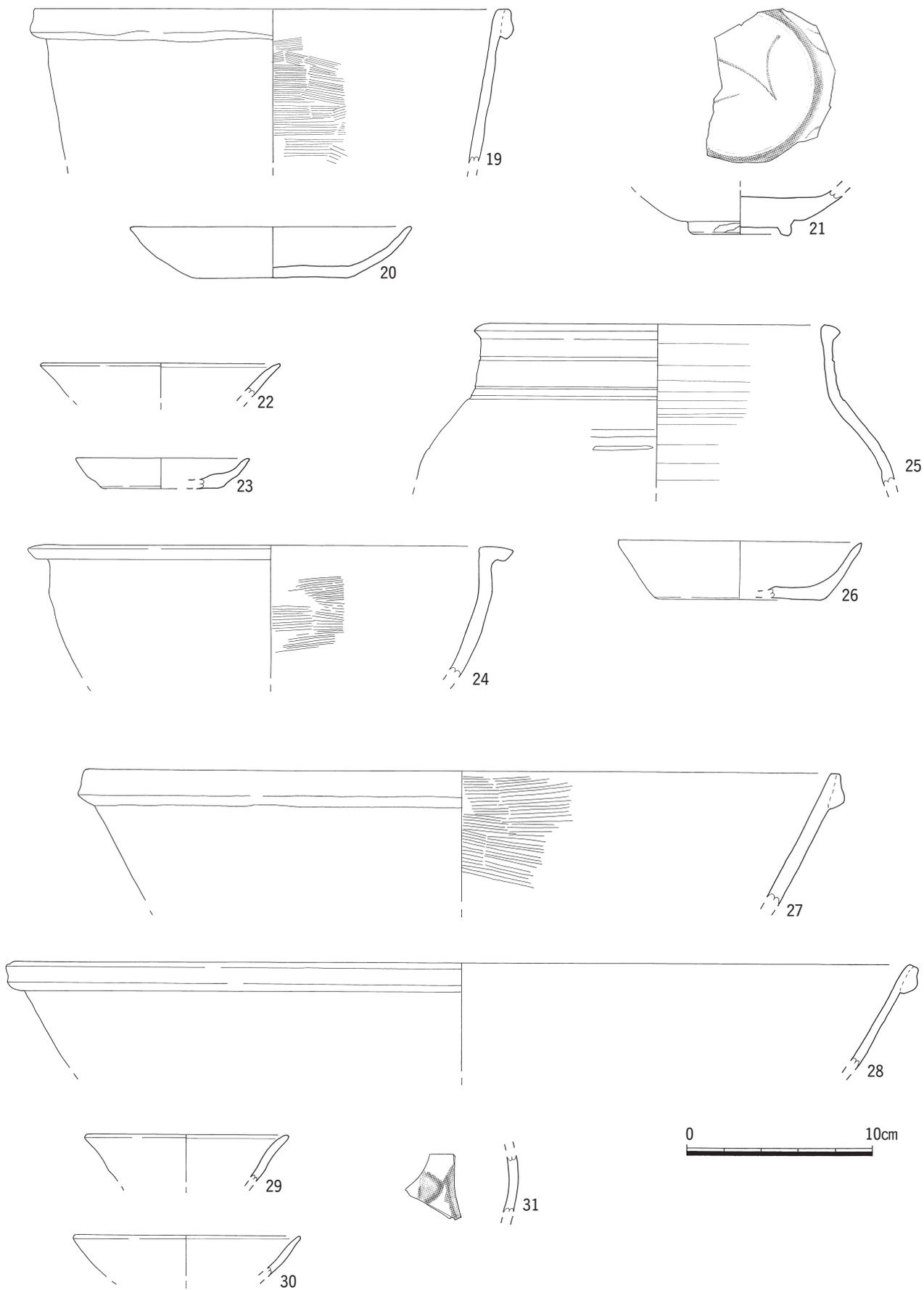


图8 出土遺物2 (1/3)

四ツ木遺跡 4 区出土遺物一覧表

法量の単位はcm。()は復原径、< >は残存径。

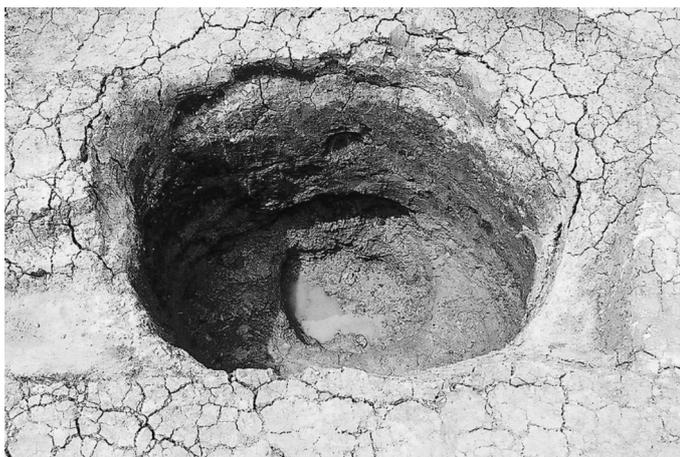
図版番号	遺構	種別	器種	法量	残存状況	色調	備考	登録番号
				①口径②器高③底径		()は内面		
図 7-1	SD 401	瓦質土器	碗	①(26.4)②<4.0>	口縁部一部残存	灰白色		040346
図 7-2	SD 401	青磁	碗	②<5.6>③(12.8)	高台～底部一部残存	明緑灰色		040350
図 7-3	SD 401	土師器	小皿	①(8.2)②(2.0)③(6.2)	口縁部～底部 1/3 残存	にぶい橙色		040348
図 7-4	SD 401	土師器	小皿	①(8.2)②2.2③(6.0)	口縁部～底部 1/2 残存	にぶい橙色		040349
図 7-5	SD 404	青磁	碗	①(17.4)②<3.4>	口縁部一部残存	オリーブ灰色		040352
図 7-6	SD 404	青磁	碗	①(12.4)②<3.4>	口縁部一部残存	明緑灰色		040354
図 7-7	SD 404	白磁	碗	①(5.6)②<3.1>	口縁部～胴部にかけて1/4残存	灰白色		040353
図 7-8	SE 402	土師器	小皿	①(8.3)②(1.3)	口縁部～底部にかけて1/3残存	にぶい黄色		040355
図 7-9	SE 402	土師器	坏	①(13.0)②(3.4)③(8.6)	1/5 残存	明オリーブ灰色	糸切り痕	040356
図 7-10	SE 402	瓦質土器	碗	②<2.6>③(8.2)	高台～底部にかけて1/4残存	にぶい橙色	高台付	040359
図 7-11	SE 402	白磁	碗	①(11.4)②<2.4>	口縁部一部残存	浅黄橙色		040358
図 7-12	SE 403	土師器	坏	①(11.8)②(3.5)③(6.1)	口縁部～底部にかけ1/4残存	黄橙色	へラ切り	040365
図 7-13	SE 403	土師器	坏	①(12.8)②(3.0)③(7.4)	口縁部～底部にかけ1/3残存	黄橙色		040367
図 7-14	SE 403	土師器	坏	①(13.5)②(2.3)③(6.8)	口縁部～底部にかけ1/4残存	黄橙色		040366
図 7-15	SE 403	土師器	碗	①14.3②6.4③7.6	ほぼ完形	黄橙色	高台付	040363
図 7-16	SE 403	土師器	碗	②<3.5>③(10.0)	高台部 1/4 残存	黄橙色		040368
図 7-17	SE 403	土師器	碗	①14.8②6.0③8.0	ほぼ完形	灰白色		040364
図 7-18	SE 403	須恵器	壺	①(43.5)②<13.0>	口縁部一部残存	灰色		040370
図 8-19	SK 402	土師器	土鍋	②(24.6)③<8.4>	口縁部、底部 1/5 残存	にぶい橙色		040331
図 8-20	SK 402	土師器	坏	①(15.3)②<2.8>③(8.2)	口縁部～底部にかけ残存	浅黄橙色	糸切り痕	040332
図 8-21	SK 402	青磁	碗	②<2.4>③(4.4)	高台～胴部にかけ2/3残存	オリーブ灰色	高台付	040333
図 8-22	SK 403	白磁	碗	①(12.8)②<1.8>	口縁部一部残存	灰白色		040335
図 8-23	SK 403	土師器	小皿	①(9.3)②(1.6)③(6.4)	口縁部～底部にかけ1/4残存	にぶい黄橙色		040337
図 8-24	SK 403	土師器	土鍋	①(26.2)②<7.2>	口縁部～胴部にかけて一部残存	にぶい褐色		040336
図 8-25	SK 404	青磁	壺	①(18.2)②<8.8>	口縁部～胴部にかけて一部残存	明灰黄色		040338
図 8-26	SK 404	土師器	坏	①(13.2)②<7.0>	口縁部～底部にかけて1/3残存	橙色		040339
図 8-27	SF 401	土師器	土鍋	①(40.2)②<3.1>	口縁部～胴部にかけて一部残存	橙色		040340
図 8-28	SF 401	土師器	土鍋	①(48.6)②<5.7>	口縁部～胴部にかけて一部残存	にぶい橙色		040341
図 8-29	SF 401	白磁	碗	①(10.6)②<2.4>	口縁部一部残存	灰白色		040343
図 8-30	SF 401	白磁	碗	①(12.0)②<2.2>	口縁部一部残存	明緑灰色		040342
図 8-31	SF 401	染付	碗	幅3.5 厚0.5	一部残存	灰白色		040345



1. 四ツ木遺跡4区全景 (西から)



2. 同 (東から)



3. SE 401 井戸 (南から)



4. SK 401~SK 404 土坑 (東から)



5. SD 403・404 溝 (東から)



6. SF 401 道路 (北から)



7. 出土遺物 1



8. 出土遺物 2

第3章 四ツ木遺跡5区の調査

共同住宅の建設に伴い、120㎡を対象に緊急発掘調査を実施した四ツ木遺跡5区は、大木川の左岸約100mの微高地に位置する。地番は鳥栖市曾根崎町字前1143-3、1145-1である。標高は15m前後で、調査前は平坦な水田・畑地に造成されていた。

調査の結果、近世の集落跡を検出した。主な遺構は井戸跡2基で、あと柱穴が多数検出された。井戸は断面逆台形の素掘りで、平面形は1.5×1.7の方形のもの（SE501）と、直径1.3mの円形のもの（SE502）がある。いずれも深さが1m程度の浅井戸であるが、遺構掘り下げ後は湧水が確認できた。柱穴には直径12cm程度の柱根が残存するものがみられた。柱穴の深さは深いもので60cm程度である。

遺物は、井戸跡や柱穴から、近世前半期を主体とする陶器・磁器、土製品（土鈴）、銅銭（寛永通宝）が出土した。伊万里とみられる磁器は、染付が主体でわずかに青磁も含まれる。陶器は雑器類が主であるが、17世紀後半の内野山窯の皿が出土している。その他、釘とみられる一部木質の残る鉄製品や、二次的使用が考えられる外面に炭化物が付着した丸瓦片が出土したほか、中世の流れ込みとみられる貿易陶磁の細片が出土した。

調査地区の性格としては、柱穴の配列状況から、井戸（SE501）を取り込んだ、一辺6m程度で平面形態が方形の掘立柱建物の存在が想定できる。ただ、柱穴の規模から、屋敷地というよりは農作業に伴う小屋のようなものであった可能性が強い。なお、調査区の西側1/3程度が落ち込みとなっており、原地形は、そのまま南西方向に大木川右岸に至る傾斜地であったようである。

あと、現代のものであるが、長さ36.0、径6.5、厚さ1.0cmを測る、素焼きの排水用土管が調査地区に埋設されていた。埋設状況は個体を並べただけで、とくに接合処理は成されていない。これは1950年代に埋設されたことがあきらかで、当時のほ場改良設備の実態を知る上で興味深い。

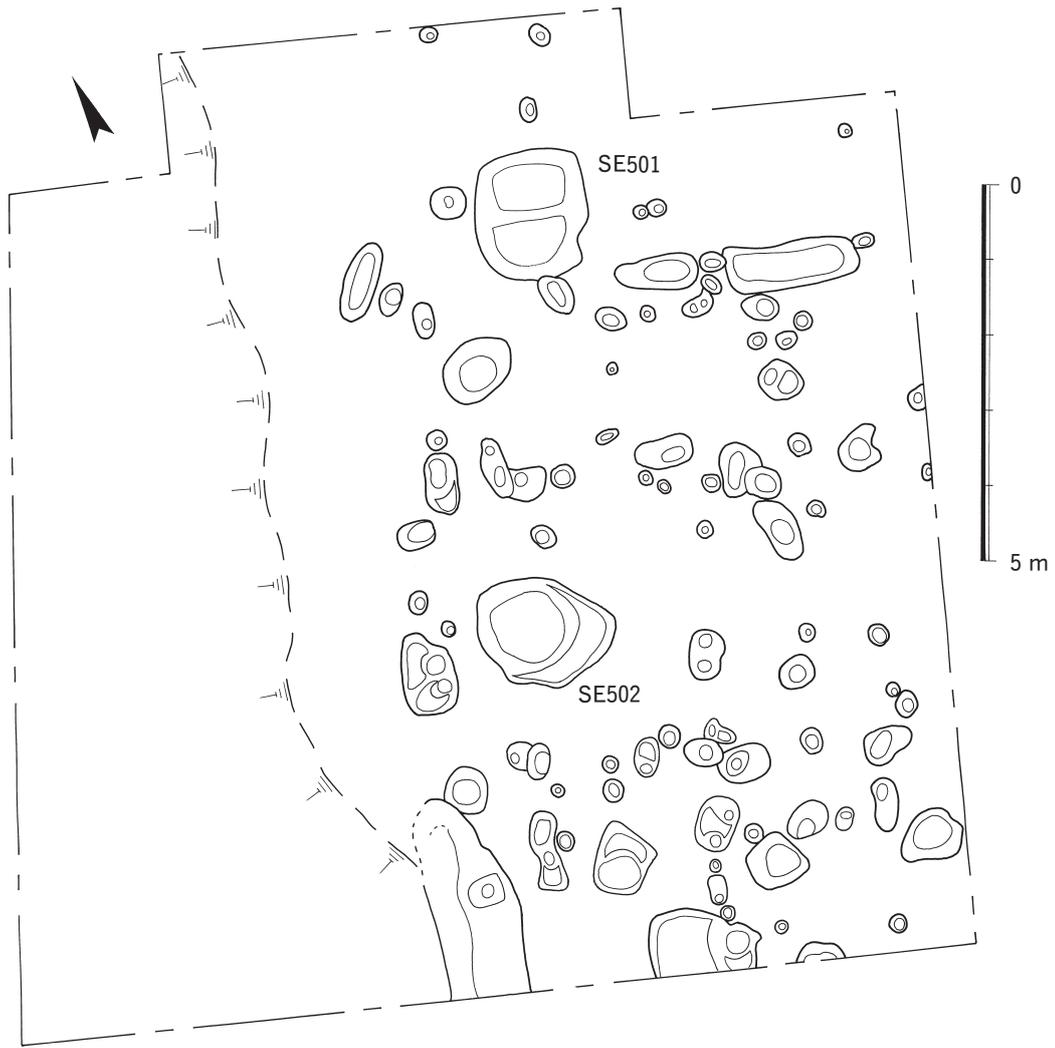


图9 5区遺構配置図 (1/100)



1. 四ツ木遺跡 5区全景 (北西から)



2. 同 (北東から)



3. 同 (南から)



4. SE 501 井戸 (東から)



5. SE 502 井戸 (西から)



6. 柱穴柱根残存状況 (北から)



7. 出土遺物 1 (内野山窯皿)



8. 出土遺物 2 (染付皿)

第4章 まとめ

大木川左岸に立地し、古代～中近世にかけての遺構が出土した。4区では、古代～鎌倉期と推測される井戸及び土坑が出土し、中世後期と思われる区画溝は、小規模な屋敷跡もしくは屋敷等に伴う何らかの区画された場所の可能性が指摘できる。またその区画溝と平行に2条の側溝をもつ道路跡も確認された。道路部分については小石が敷かれ、ふみ固められている。周辺の確認調査の際、その続きが確認されており、南西に真っ直ぐ伸びていることが判明した。当時の町割りをみるうえで貴重な発見である。遺跡地内については、切土により整地されているようではほぼ一定の標高を保っている。大規模な造成工事が実施されていたようである。5区の調査では井戸のほか掘立柱建物跡が検出されている。主に中世末～江戸期にかけての遺跡のようである。なお四ツ木遺跡の中心地は現在の曾根崎町老松神社付近と推測されるため、今後周辺地区については留意する必要がある。

当地は、大宰府天満宮安楽寺領荘園（曾根崎荘）と比定されている。文治3年（1187）源頼朝下文安に「肥前国基肄郡内・曾根崎・堺別府行武名」と記載され、平家没官領で御家人平通隆（曾根崎氏）の所領とある。また承久6年（1195）には曾根崎氏の名前が確認できる。関東下りの御家人と思われる。

鳥栖市文化財調査報告書第 79 集

四 ツ 木 遺 跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成 19 年 3 月 30 日 発行

編 集 鳥栖市教育委員会
発 行 佐賀県鳥栖市宿町 1118 番地
印 刷 有限会社 久光印刷
佐賀県鳥栖市田代昌町 477 番地 6